

岡先生の不在

岩谷 智

私にとって岡先生のご不在は三度目である。最初は四回生から大学院に入る年、そして、二度目は大学院を終え何年目かのオーバードクターの時、そして今回が三度目である。二度目までは岡先生のご不在は一年で終わったが、今回は悲しいことに期限がない。

さて、そもそも最初にお会いしたのがいつだったか、どうしても思い出せない。二回生の終わりに松平先生の研究室に岩崎務、大西史子と私の三人が「水野門下生」としてご挨拶にうかがったことは確かなはずだが、そのとき岡先生、中務先生にもお会いしたのかどうか記憶がないのである。ただそのとき文学部旧館の階段を上りながら感じた胸の高まり、鼓動だけは妙に生々しく思い出される。その後この鼓動は準備不足のまま研究や演習に出席するたびに繰り返されることになるが、このときばかりは「神々」との対面をはじめて許される信者のそれであった。

文学部入学当初国文志望だった私が西洋古典に興味を持ったそもそものきっかけは水野有庸先生のラテン語四時間コースを履修したことであった。火曜日と土曜日、四時から九時までぶっ続けに五時間続くハードな授業に同級生が「脱落」していくなか、岩崎、大西の両名と私はじつにまがりなりに最終段階までたどりつくことになる。しかし一二月の志望学科選択時点では三人とも西洋古典は第一志望ではなかった。私はあいかわらず国文志望であったし、ほかのふたりもそれぞれ意中の学科があったはずである。ところがある日水野先生は授業後私たち三人を食事にお誘いくださり、西洋古典入りを強く勧めてくださったのである。私はもとより非才を自覚していたものの、水野先生の「西洋古典には神のごとき学者がお二人おいでになる。松平先生と岡先生だ」の一言で気持ちが固まったのである。

ところが前述したようにいまその神々との最初の遭遇のことがはっきり思い出せないのは我ながら情けない限りである。

岡先生の最初の記憶、それはその後三回生になってはじめて経験した西洋古典研究会でのご様子である。この研究会は学会の発表の予行演習をかねて楽友会館の一室で行われた。同時に我々新三回生三人の歓迎会もかねていた。いま

から思えばずいぶん手荒な歓迎会であった。その発表の内容が私にはまったく理解できなかったからである。説明に使われる専門用語は聞いたことのないものばかりである。参考に配られた資料にはラテン語が記されていたが、辞書なしでは歯が立たない。ところが、質問の時間になると先生方だけでなく大学院の諸先輩がたもその資料をもとにまたしてもわからない単語をならべて議論を展開される。

ひたすら呆然とその時間を過ごした私たちは、そのあと自己紹介をさせていただいた。そのとき私は「平家物語に興味があるのでガリア戦記をまずとりあえず読破したい」というようないまから思えば実に噴飯ものの発言をしどろもどろになりながらしたのである。そのとき岡先生はしずかに「ずいぶん趣のちがう作品ですが、しかしガリア戦記からなさるのは賛成です」と静かにおっしゃった記憶がある。私はそのときはじめて神を意識したのである。岡先生はそのとき同じ四十歳台の半ばでおられた。ほぼ今の私と同じ年齢である。比較すること自体そもそも畏れ多いことだが、今私が当時の岡先生と同じ立場に立ったとしたらなんと言えるだろうか。いずれにせよ学生に感銘を与える一言にならないことだけは確実である。

三回生のあいだわたしたち三人は岡先生のリヴィウスの演習に出席させていただいた。これが実に情けないことに歯がたたないのである。まったく分量が読めないのである。では正確に読めるかとなるとそれもきわめて怪しいのである。私たち三人は授業が終わるたびに次の回の分担を「じゃんけん」で決めていた。OCTにして半ページほどをめどに割り当てを決めるのである。となると三人で一ページ半、授業は三十分もしないうちに終わってしまう。最後に担当したのは「すいません。ここまでしかやっていません」と謝る係りである。岡先生はいつも「そうですか」と静かにおっしゃるのみであった。あきれておられるとかあきらめておられるというような感じは、私たちの厚顔無恥を棚にあげるとしても、不思議なことにまったくしなかった。

そして最初の岡先生の不在がやってきた。私たちが四回生になったとき、岡先生はドイツに在外研究のために赴かれた。この年、ラテンで高橋宏幸、ギリシアで城江良和の両君があらたに西洋古典教室に加わり、私たち三人はとりあえず「先輩」というものになったのである。しかし私たち三人の学力水準はこの両君にはるかに劣り、演習などでは最後に訳を担当するのが後輩ということが常態となっていた。

またしてもまがりなりに卒論を書き終え、修士入学のための筆記試験も終わ

ったころのことである。私たちは松平先生に研究室に呼ばれた。むろん訓戒のためである。「君たちを修士課程に入れるにあたって、このままでは岡君に申し訳がたたない。私は退官間近で、あとは岡君に託すことになる。この成績では困る。もっと勉強をしてくれなければ困る」という内容であった。

岡先生がドイツからお戻りになり、私は修士課程に進み、そしてその修士課程を三年かかっておえ、博士後期課程に進学した。このころ私は西洋古典を一生続けるかどうかずいぶん悩んでいた。さすがに学部生のころのようにまったく読めない状態ではなくなったものの、西洋古典には学ぶべきものがあまりに多くあり、また、どうしても欧米の研究者と比べれば語学の壁があつい。一生かかってなにがしのことが達成できるのだろうか。もし達成できないのならば、今のうちにやめて転身をはかったほうがいいのか、という悩みである。いうまでもなく現実逃避である。岡先生がドイツ滞在中の成果を世に問われ、また授業にも積極的にそれらを織り込まれていかれるなか、私は反対に授業から離れるようになった。

ところが岡先生はたまに研究室を訪れる私に一言も授業の欠席のことはおっしゃらなかった。私も自分の悩みについてお話することはなかった。ただ「今こんなものをよんで、こんな風に考えています」と申し上げるのみであった。すると岡先生は、「これこれの論文は読みましたか」とすぐに教えてくださるのである。かならずしも先生のご専門ではない分野であっても事情は同じである。私はその論文をお借りし、そして何週間かのちに、その感想をご報告するというかたちでかろうじて西洋古典との糸をつないでいた。

そうした結果が博士後期課程の研究報告三冊に残っている。いま読み返してみると、ところどころに岡先生の書き込みがある。私が蠅螂の斧のごとく岡先生のお書きになった論文に批判を加えている箇所には、じつに詳細な参考文献とともに、岡先生の再批判がきちんと書かれている。私を完全に研究者として扱ってくださっているのである。

博士課程の間、私は一度だけ岡先生にしかられたことがある。博士課程の二度目の研究報告のときのことである。私の予備発表が終わると、岡先生はとても残念だという表情をうかべておっしゃった。「どうしてそんな小さなことを研究するのですか」と。私はこの静かなお声に一挙に目の覚めた思いがした。自分の大変な思い違いに気づいたのである。誰も取り上げていないことに着目し、誰からも批判されないかたちで論を展開すれば、それが学問的成果だと思いこんでいたのである。文学を研究するということは重箱の隅をつつくことの

対極にあるということを岡先生はたった一言で教えてくださったのである。

やがて私は博士課程を満期退学し、研修員という名のオーバードクターになった。西洋古典学会の発表も無事おえ、いっばしの研究者になったつもりのところである。

岡先生はこのころ学会の事務処理をコンピュータ化しようと考えておられた。私はおそらく西洋古典学会の会員のなかではもっとも初期にコンピュータを導入したひとりだと思う。あるとき岡先生は私に「岩谷君、コンピュータのことを教えてくださいませんか」とおっしゃった。

岡先生に私がなにかを「教える」などということがあるとは夢にも思っていなかった私は、さっそく自宅からコンピュータを先生の研究室に運び、デモンストレーションをさせていただいた。ワープロから表計算といったところだったと思う。岡先生はすぐにコンピュータの有効性を理解され、すぐさま学会事務処理のためにコンピュータを導入されることを決意されたのである。しかも、貴重なお時間を費やされて名簿管理の簡易プログラムまでご自分でお作りになったのである。この簡易言語に関しては岡先生の知識はすぐさま私などの追従を許さぬものになったけれども、最初の頃なんか私もお手伝いをさせていただいた。そして問題が解決したときの岡先生のお喜びになるお顔は私にとってもなによりも喜びであった。

岡先生のドイツ再滞在のための二度目の不在は私にはあまり印象がない。私はこのころ生活費のためかなりの非常勤をこなしており、大学にはほとんど顔をださなくなっていた。岡先生には一年に数回研究会や学会でお話をうかがうだけになっていた。ドイツにあられをお送りしたことはあったが、いずれ帰国され、前回のように山のような成果を持ち帰ってこられるだろうとだけ思っていた。

そして三度目の不在である。神として顕現なさった岡先生がいま天国におられる。岡先生が歩んで行かれた学問の高みをめざす力は私にはなかったが、その静かで暖かな励ましによってかろうじて迷子にならずにすんできた。至らぬ弟子であったが、いつも対等の研究者として扱ってくださった。生意気な人間であったが、いつも寛容なお心で包んでくださった。

しかしまだ私は岡先生の不在の意味を理解できないでいる。